

## 九州伝産の旅

### vol.15

2026年

## 大島紬 はじめ商事

### <織元紹介>

奄美大島の有屋集落で8代続く織元。先代が事業を会社組織化する。2018年に元允謙氏が代表を継ぎ、奄美を全国に紹介するべく新しい取組にチャレンジしている。2015年に新築した工房は、背後に奄美の豊かな山のふもとの有屋集落のなかであり、大島紬や奄美布、クリスタル大島紬等の製品を展示販売している他、製造現場の見学や染色・機織りの体験も行っている。



# 大島紬 はじめ商事

奄美大島の豊かな自然のもと、

多彩な材料で織る

○革紐やビニール袋、和紙やチラシを織り込んだ、伝統ある織物からは想像もつかない生地の数々を生み出すのは、奄美大島で8代続く織元の当主 元 允謙（はじめ ただあき）さん。伝統にとらわれることなく、大島紬の可能性を信じて目一杯挑戦を続ける元さんにお話を伺いました。



はじめ商事 元 允謙さん



### ■大島紬の歴史・特徴

大島紬のルーツは1300年以上も前にさかのぼります。養蚕の適地である奄美大島では、古くから絹織物が作られていたようです。奄美に自生するテーチ木やその他の草木を使って染色が行われており、これが現在の本場大島紬のテーチ木と泥による染色のルーツとされています。奄美では絹糸のほか、芭蕉や木綿などの糸と混織したりしながら、日常着として自由に織物を楽しんでいましたが、次第に糸を浮かせる花織や縞などの表現も多彩になり、洗練された織物へと変化。やがて高級織物として珍重されるようになり、薩摩藩からは役人以外の島民の紬着用御禁止令が出されました。明治40年頃に締機による織締縞という方法を採用するようになり、世界に類をみない本場大島紬独特の縞によるデザインを表現できるようになりました。大島紬独特の伝統紋様は、トンボや亀の甲羅、ソテツ、風車、ザル等、奄美大島の豊かな自然や暮らしの道具の形をヒントに生まれたものです。現在は伝統的な色・図案に加え、多彩なカラーやデザインが生まれています。精緻なデザイン、光沢を抑えた気品のある艶、軽くて暖かくしわになりにくいしなやかな着心地が特徴です。

※本場大島紬織物協同組合 HP および本場奄美大島紬協同組合 HP より引用・編集。

## Q. 家業の織元を継ぐつもりはなかったとお聞きしています。大島紬の世界に入ったきっかけを教えてください

元々、家業を継ぐ気はありませんでした。そもそも、育ちは福岡で、大学卒業まではずっと福岡にいましたし、福岡の店（実家）も奄美にあるはじめ商事の販売拠点といった形だったので、織り機のオサの音に囲まれて育ってきたというわけでもありません。だから、大学ではコンピューターグラフィクスをやりたくて、画像工学を専門に学んでいました。

転機は大学3年の夏休みです。友人と奄美に遊びに来ていたものの暇をしていたので、父の勧めでふらっと機織りの作業現場を見た時のことでした。そこには、自分と同じくらいの年頃の人たちが、自由な発想で大島紬を織っている光景が広がっていて、自分の中の大島紬の概念が一変した瞬間でした。それからというもの、1年かけて大島紬を学び、大学卒業後は大島紬を売るためのノウハウを学びに3年間京都の呉服店で働き、その後も紆余曲折ありながら、父の会社に入る形で業界でのキャリアをスタートしました。

## Q.元さんが大島紬を作る際のモットーを教えてください

大島紬は分業が進んでいて、良い物を大量生産できる仕組みがあります。でも、私は生地を作ることよりも、作った生地で如何にお客さんが求めるものを提供できるか、オーダーメイドで対応していけるかを追求するのが好きなんです。「因数分解」というか、大島紬の根幹部分は残しつつ、工程を細分化して行って、他分野の中に入れていけるような形で大島紬を残していければと思っています。

そもそも大島紬にはこだわっていません。私のテーマは「奄美の伝統と技術で新しい物創り」であって、「オリジナル生地を作るテキスタイルメーカー」になりたいという想いがあります。

## Q.<sup>あまみふ</sup>「奄美布」と名付けられた布も織ってらっしゃいますね

古い着物を裂き、それを緯糸に使うって織っていく、裂き織という技法で作られた布です。昔は古い着物をばらし、当たり前に行っていた。大島紬の材料を使う奄美布は丈夫で独特の風合いがあります。奄美の伝統の大島紬を支えるための、今後も継続しやすい取組だと思っています。

## Q.やはり一番気になるのはフェラーリとのコラボですが、きっかけは何ですか

2016年頃にジャパンブランド育成支援等事業補助金を利用して、3年かけて海外で市場調査をしていたんですが、最後に訪れたニューヨークで、富裕層向けのジャパンツアーを企画しているというウェブメディアの会社と出会いました。そこで、色々お願いをして、奄美をツアーに組み込んでもらうことができました。そして、ツアーの参加者の1人がフェラーリのデザイナーだったんですよ。そのデザイナーは日本の職人とコラボしたフェラーリを作りたいと思っていて、日本中の様々な生地を見てまわっていたようです。大島紬にコラボの話が舞い込んできたのは、それから1年くらい経った頃でした。

フェラーリとのコラボで使った生地は、ポリエステルのような強い糸を使用して作ったもので、大島紬ではなくて、奄美布です。せっかく化学繊維という物があるのだから、絹にこだわる必要はないと考えています。お客さんに合わせた物創りをすることが、職人の腕の見せ所だと私は考えています。



### Q.クリスタル大島紬について教えてください

奄美の方は大島紬のことがすごく好きなんですけど、着物として身につけることはあまりなくて、小物類を持っていることが多いです。そこで、大島紬をもっと日常に落とし込んでいくために、自分自身元々作りたかった食器にしようと思いました。素材の面で色々と苦労はありましたが、最終的にガラスを使うことで、今の形になりました、最近では島のギフトの定番になってきています。そういった形で加工できるということも分かったので、廊下の壁のタイルとして使っていただくこともありましたね。



### Q.今まで作ってきた物の中で、一番面白いと思うものはなんですか

ソファを作るときに出る革の端材をつなぎ合わせて、紐状にしたものを編み込んだ生地は良かったですね。パリに持って行って何かに使えないかと模索してみたのですが、強度の課題があって、製品化にはつながりませんでした。でも、めちゃくちゃカッコいいですし、サステナブルな取り組みでもあると思うので、いつかは家具とかに使えたらと思っています。



## profile

織元名

有限会社はじめ商事

場所

鹿児島県奄美市名瀬有屋町 30-1

電話

0997-52-1741

定休日

不定休

営業時間

10:00~18:00 (日曜は 16:00 閉店)

Web サイト

<https://hajimeshoji.com/>



## Q.元さんにとって伝統を受け継ぐとはどういうことですか

伝統工芸品は、その時代の流行やニーズに沿って発展してきたものであって、本来は最先端の技術やデザインだと思うんです。でも、いつからか手作りの物を残すために「保護の対象」になってしまい、進化が止まってしまったんじゃないかと思います。それはそれで大切なことですが、みんなが保護に回ってしまったがために、守っているつもりがいつの間にか自分たちの首を絞めてきたんだと思います。伝統工芸士として、伝統を守っていく義務はもちろんありますが、技術・技法を使って新しい物創りをやっていくことが、自分の役目だと思っています。




---

初めて訪れた奄美大島は空、海、山の色が濃く、存在を主張していました。自然や暮らしをモチーフとした大島紬の伝統紋様が生まれ発展してきたのはその空気にあるのかもしれませんが。大島紬と奄美大島に魅せられた元さんが織る奄美布もまた元さんの熱意のもと、奄美の空気に合わさって発展していくに違いありません。

---

